

大きな段をつくりだしている。

全国的に見ても古墳以外の出土品としては石川県片山津遺跡(註9)、福井県河和田遺跡(註10)、千葉県成田ニュータウンLoc.40、同千原台ニュータウン草刈遺跡、そして矢作貝塚の5ヶ所のみである。草刈遺跡と矢作貝塚を除く他の3遺跡は、石製品の工房址遺跡と考えられるところから、攪乱中とはいえ、集落からの出土は新たな問題提起となった。すなわち、二つの可能性について検討されなければならない。一つは、草刈遺跡123-B号址及び矢作貝塚003号址の周辺の前期古墳(古く削平された)の存在であり、他の一つは、前期古墳の被葬者と深い関りのある集落の存在である。冒頭でも触れたように、古墳出土の紡錘車形石製品の場合には、大阪府紫金山古墳、黄金塚古墳、三重県石山古墳、静岡県三池平古墳、千葉県手古塚古墳、福島県会津大塚山古墳等の前期古墳に出土の中心がある。手古塚古墳出土品の場合には、主体部粘土槨の遺骸の頭部付近、三角縁神獸鏡、四獸鏡及び籠手に近接して出土しており(註11)、有段面に残された付着物からこの遺物が布により包まれていたことを示している。このことから紡錘車形石製品と古墳の被葬者の深い関係が窺われる。こうした背景のもとで集落からの出土が確認されるならば、古墳と住居の共通した祭具、あるいは古墳の被葬者が生前からその象徴的な所有物として携帯していた器具(註12)という可能性についても検討されなければならない。このような可能性を持った紡錘車形石製品は、中期古墳にみられる石製模造品とは全く異った性格の遺物であることを指摘しておきたい。

*

木更津市手古塚古墳出土の紡錘車形石製品を実見するにあたり、国立歴史民俗博物館杉山晋作氏

と、県立上総博物館築比地正治氏に大変お世話いただき謝意を表する次第である。

(8班・佐倉第三事務所)

註

- 1) 清藤一順他『千葉市矢作貝塚』昭56
- 2) 伊東信雄・伊藤玄三『会津大塚山古墳』昭39
- 3) 岩崎卓也「いわゆる碧玉製紡錘車について」『木代修一先生喜寿記念論文集3—民族史学の方法』昭52
- 4) 穴沢咏光・西岡秀雄「田園調布宝来山古墳の研究」『史誌』15号 昭56
- 5) 前掲(4)に同じ。
- 6) 天野努・編『公津原II』昭56
Loc.40の019-B号址の中の遺物番号46「剝片」とされた遺物は筆者の実査によれば図1-3に示す笠形未製品である。
- 7) 伊達宗泰・小島俊次『メスリ山古墳』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告35』昭52
- 8) 千原台ニュータウン草刈遺跡は千葉県文化財センターにより近い将来報告が予定されており、詳細は報告書の刊行を待って参照されたい。
- 9) 大場磐雄他『加賀片山津玉造遺跡の研究』昭38
- 10) 大場磐雄他「福井県河和田遺跡の玉作工房址」『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』昭40
- 11) 木更津市手古塚古墳出土の紡錘車形石製品の出土状況に関して、国立歴史民俗博物館助教授杉山晋作氏より御教示いただいた。
- 12) 大阪府黄金塚古墳の筒形石製品との伴出、奈良県茶臼山古墳の鐙形石製品との伴出、同メスリ山古墳の鉄芯付紡錘車形石製品、岐阜県白山社古墳の筒形石製品との伴出等に注目し、紡錘車形石製品が『玉杖』の一部であり、呪術的な儀器の一端をなすものであるとの見解もある。

八日市場市吉田所在の須恵器窯について

土屋 潤 一 郎

1. 環境と現状

本窯跡は、八日市場市の北西部にあたる吉田地区八辺^{やっぺ}に所在する。八日市場市に隣接する香取郡多古町を流れる栗山川の支流である借当川の南側

台地の裾部に位置する。借当川から樹枝状に支谷が入り込み、極めて複雑な地形を造っている。本窯跡は、この台地の北部中央をきざむ一支谷の奥部にあり、台地が水田と接しようとする西向した



図1 八日市場市八辺窯跡の位置と千葉県下須恵器窯跡分布図

傾斜角約 25° 前後の斜面を利用して造られている。この支谷に造られた水田を周回する農道によって台地の裾が一部削平されたため、本窯跡の断面が露呈したものであり、昨年小学生の岡野隆之君により発見されている。この断面は、幅約 1 m ほどであり、水田面と床面の比高差は約 2 m である。また、この断面から水田までの距離は 4 m ほどで、標高は 15 m 前後の所である。更に、農道の側溝部と水田内には、本窯跡から流れ込んだと思われる土器片の散布が見られる。後述するように、不十分ではあるが還元焰焼成された遺物が見られること、断面の形状、地山の対熱変化の様子、および周囲の地形的条件などから、本遺構が須恵器製作に用いられた窯跡であると考えられる(図4~6)。

本窯跡から北方 400 m の台地上に、昭和 30 年に慶応大学により調査され、縄文中期初頭の下小野式や五領ヶ台式の土器を出した八辺貝塚がある。更に、支谷をはさんで本窯跡と対峙する台地上には、土師器の散布地である八辺遺跡がある。また、南西 400 m の台地上には木積貝塚があり、その東に山王台古墳、西に土師器の散布する神台遺跡がある(註 1)。

須恵器の窯は、燃焼部と焼成部の間に隔壁を持たず、焚口から煙り出しまでひとつながりの構造である。このような構造の窯を窰窯あながまとよび、この築造法には、丘陵の斜面を利用し、トンネル状に掘り抜いて造る地下式と、丘陵斜面に長い溝を掘



図2 八辺窯跡の立地(1/50,000)
—この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図(八日市場)を使用したものである。—



図3 周辺地形(1/10,000)

0 200 m



図4 断面



図5 周辺情況



図6 遠景（南西より撮影）

り、溝の上部に天井をかぶせて造る半地下式がある。一般的に須恵器の窖窯には半地下式が多く用いられる。更に、焼成部の側壁は、窯内に火熱をまんべんなくまわすために、蛇腹のような凹凸がつけられることが多い。また、まれに窯底が平坦な平窯様のものも見られる(註2)。

本窯跡の断面では、天井部若しくは天井構築物の様子が明瞭でなく、その構造様式を判断するこ

とが困難である。床面付近は、白色の砂質粘土層に切り込まれている。床部には30cmほどの厚さに焼土ブロックが堆積し、その上に炭化物層が3～5cmの厚さで見られる。側壁は、地山をそのまま利用しているように見えるが、床部の焼土ブロック層が、火入れにより崩れた壁土を固め、更にその上面を床として再利用した可能性を持たせる。遺物は、炭化物層直下から床面直上までの間に露

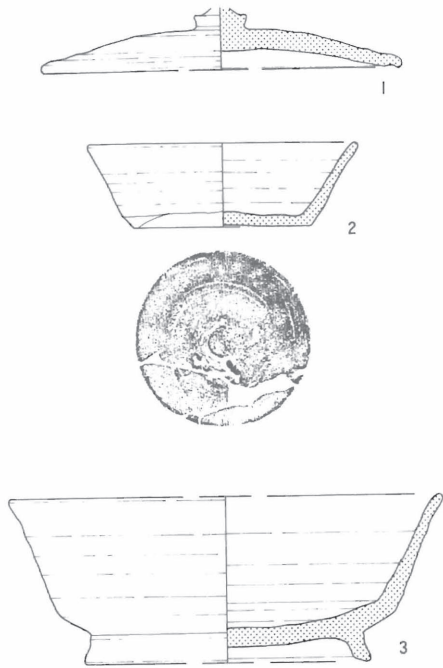


図7 採集遺物(1/3)

呈している。

2. 遺物

図7-1は蓋である。天井部中央にやや扁平な宝珠状のつまみを有し、口縁端部が僅かに下方向へ折れ曲がっている。天井部外面には回転へら削り調整がなされる。2は坏である。ほぼ平坦な底部から体部は直線的に開き、口縁部付近でやや外反する。底部外面は回転へら切り後、全面に回転へら削り調整がなされる。また、体部下端にも回転へら削り調整が施される。3は高台付坏である。体部はほぼ直線的に開き、口縁部でやや外反する。高台は「ハ」の字状にひろがる。坏底部外面は回転へら削り調整がなされる。

以上の3点の他にも何片かが採集されており、それらの中には、蓋や坏の小破片が多い。また、須恵器の比較的大型の甕の破片や、明らかに二次的焼成を受けたと思われる土器片なども見られる。他の遺物と様相を異にするこれらの破片は、窯詰めの際に、生土地(未焼成品)を安定させ、融着を防ぐために焼き台として用いられたものと考えられる。このような例は多くの窯に見られるもの

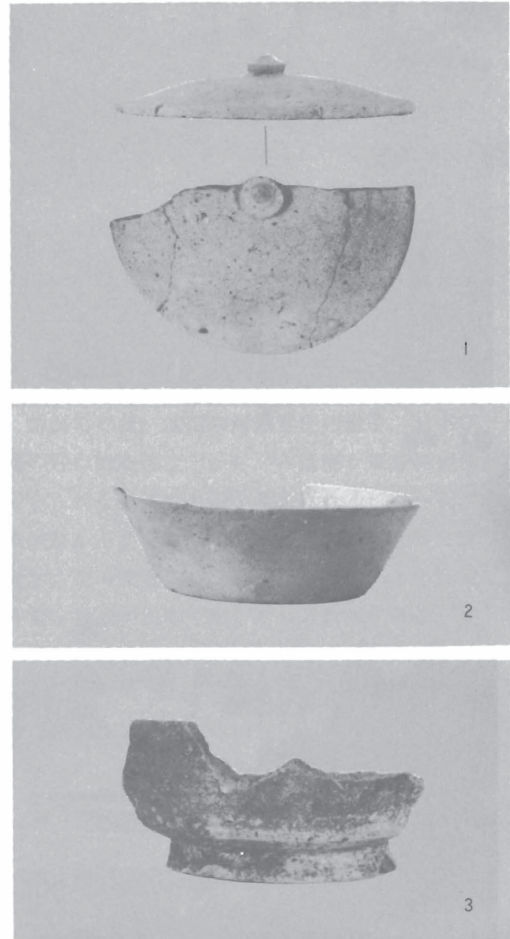


図8 採集遺物写真

である。焼き台用の破片を除くと、他の遺物の色調は、明褐色を呈すものが殆どである。図示した3点についても同様で、2・3に僅かに青灰色に近い色調の部分を残すのみである。

須恵器の持つ青灰色の色調は、還元焰焼成によってもたらされるものであるが、実際には、最初から最後まで還元焰焼成されるわけではない。初めは大量の空気を流入させ、酸化焰により窯内の温度を上げ、器をほぼ焼きあげておく。次に空気の流入量を極度に減らし、逆に、燃料を大量に入れ還元状態を作り出すのである。また、須恵器の色調は、粘土中に含まれる鉄分と酸素との結合のしかたによって変化する。焼成の際に窯内へ入る空気の量を制限すると、窯内に発生した一酸化炭素が、器の原料粘土中に含まれる鉄分から酸素を奪い、酸化第二鉄(Fe₂O₃)を酸化第一鉄(FeO)に変える。須恵器の青灰色の色調は、この酸化第

一鉄の色である。この還元が不十分であると、黄色味がかったり、白っぽかったりする生焼けの須恵器が出来るのである(註2)。

本窯跡より採集した須恵器が明褐色であるのも、それらが生焼けであるためと思われる。なぜ還元が十分に行なわれなかったのか、その原因については推測の域を出ないが、技術的な欠陥か、或は、現在露呈している断面が焚口に近い部分であり、そのため比較的空気の流入が多量であったためではないかと考えられる。

3. 県内の窯跡分布

県内では、本窯跡(今後、八辺窯跡と称したい)を含め15箇所ほどの窯跡が発見されている。

- 図1-1. 八辺窯跡：八日市場市吉田地区八辺
同 2. 浅間台遺跡：印旛郡富里村根本名
同 3. 台畑遺跡：印旛郡富里村立沢
同 4. 吉川遺跡：印旛郡富里村吉川
同 5. 宇津志野遺跡：千葉市大井戸町宇津志野
同 6. 石川須恵器窯跡：市原市石川(平安)
同 7. 永田・不入須恵窯跡：市原市不入宇沢田(奈良・平安)
同 8. 高島遺跡：木更津市矢那字高島
同 9. 露岬窯跡：木更津市矢那字露岬
同 10. 伊豆山古窯跡：木更津市矢那字伊豆

山

- 同 11. 山ノ下古窯跡：木更津市矢那字山ノ下
同 12. 上名主ヶ谷窯跡(1)(2)：木更津市矢那字上名主ヶ谷
同 13. 金二谷台窯跡：木更津市矢那字金二谷台
同 14. 北谷窯跡：木更津市請西字北谷
同 15. 太田学窯跡：鴨川市太田学

これらの窯跡のうち、その時期など性格の明確なものは数少ない(註3)。

以上を以て八日市場市吉田地区八辺所在の須恵器窯跡の紹介とする。尚、採集遺物の何点かを、胎土分析の目的で、奈良教育大学の三辻利一先生のもとへ送っている。また、この窯跡の紹介にあたり、御協力頂いた方々に感謝の意を表します。

(7班・多古事務所)

註

- 1) 『八日市場市史』上巻 昭57
2) 田辺昭三『須恵器大成』 昭56
3) 図1-2以下は、千葉県広報協会『千葉県埋蔵文化財分布図』より抜粋。尚、7については、国士館大学文学部考古学研究室『永田・不入須恵窯跡』昭53による。

房 総 五 輪 塔 小 考

齋 木 勝

五輪塔は石造仏塔の一種で、供養塔や墓塔、舍利塔として造立されている。塔形は上部より宝珠の空輪、請花の風輪、笠の火輪、塔身の水輪、基礎の地輪からなり、形のうえから宝珠形、半円形、三角形、円形、四角形である。

県下に造立されている五輪塔は『元和』銘まで限ると53基確認される(註1)。最古銘は松戸市円能寺の『応永十七年』でこれを含め、室町時代前期の五輪塔が、千葉市来迎寺の『宝徳四年』銘塔まで11基、同中期の五輪塔は山田町野平香峰氏藏

の『天文二』銘塔まで6基、同後期の五輪塔は横芝町光台寺の『永禄八年』銘塔まで10基、桃山時代の五輪塔は佐原市惣持院跡の『慶長十九年』銘塔まで14基確認されている。

ほぼ時代順に掲げたが、資料的には少ないので時代別の変遷を捉えるまでには至らない。そこで型式別に概観してみたい。なお、紀年銘はないが鎌倉あるいは南北朝時代造立と思われる五輪塔も数基あるので報告したい。

石塔の計測に際して、尺寸法に留意するのは造